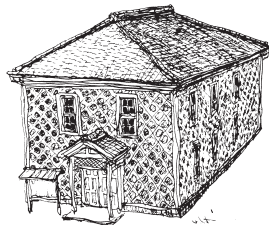


演説館



福澤先生とその門下生たちは、西洋のスピーチ、デイベートを研究し、わが国の「演説」を創始しました。三田演説館は、1875（明治8）年に開館した日本最初の演説会堂です。

●常任理事

きたがわゆうこう
北川雄光

雲外蒼天、新しい空の色

変幻自在に姿を変えて襲ってくる「敵」新型コロナウイルスとの闘いの真っ只中で、私たちはさまざまな現実を目の当たりにしています。高度に発達し、豊富な病床数を誇っていたはずの日本の医療提供体制は、パンデミックに耐えうる急性期診療機能を備えていませんでした。社会全体として不測の事態に迅速に対応できる連携体制も不足していました。ゲノム医療や再生医療、人工知能の導入など最先端技術が人類の未来を明るく照らす一方で、太古からの宿敵「感染症」を未だ制圧していないことを思い知らされました。美しい四季のうつろいに彩られた我が国土は、気候変動による自然災害頻発の過酷な環境にさらされています。世界各地では、山火事を誘発するほどの熱波が猛威を振るっています。私たちは今、あらためて旧来の方法論やノスタルジーだけに依存することの危険性を身をもって体験しています。

一方、賛否両論の中で開催されたパンデミック下の五輪において慶應義塾は、日吉キャンパスで英国チームを温かく、安全

に迎え入れ、信濃町キャンパスではコロナ診療を行いながら、テロ対策を含む万全の救急医療体制を構築してメインスタジアムを守りぬきました。三田キャンパスでは、正常なキャンパスライフを一日も早く取り戻すための職域ワクチン接種が慶應義塾社中一丸となって行われました。多くのキャンパスや一貫校では、今も未来へ向けた槌音が響いています。私たちはこの困難の中でさまざまなことを学び、自らを見つめ直し強くなっています。社会を先導し、困難の中から未来を創造する気概はしっかりと生きています。

厚い雲はいつか流れ去り、私たちが蒼天を仰ぎ見る日が来るでしょう。しかし、私たちはこれまでと全く同じ色の蒼い空を期待してはいけないのかもしれませんが。教育・研究・医療・地球規模の課題解決など全てにおいて、守るべきもの、取り戻すべきものと今こそ変えなければならぬものを見極め、さまざまな世代の叡智を結集して躊躇なく変革を遂げなければならぬ時が来ています。